

〈研究総論〉 共に創りあげる授業（最終年次）：
資質・能力を育みながら、「教科ならではの文化」
を味わう子どもたち

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾崎, 弘剛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027135

＜研究総論＞ 共に創りあげる授業（最終年次）

－資質・能力を育みながら、「教科ならではの文化」を味わう子どもたち－

研修部長 尾崎 弘剛

1 はじめに

2019 年度は、研究テーマ「共に創りあげる授業－資質・能力を育みながら、「教科ならではの文化」を味わう子どもたち－」の最終年度を迎え、主に前年度までの研究実践を基に、『対話が深める子どもの学び－「教科ならではの文化」を味わう授業－』を上梓した。

5 月には社会科の授業を公開し、共同研究者を含めて校外から 21 名の先生方に参観していただき、子どものあらわれや授業のあり方を中心にご意見をいただいた。10 月に開催した研究発表会においては、9 教科 13 授業を公開し、教科別協議で教科や授業のあり方を協議し、助言者、共同研究者から指導・講評をいただいた。以上の実践の授業案は静岡大学学術リポジトリに登録し、実践報告は①静岡大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要（第 30 巻）、②静岡大学教育学部附属静岡中学校研究紀要（第 20 号）としてまとめた。本稿は、これらの実践を踏まえた、研究全体の成果と課題を整理するものである。

2 研究の概要

本校では、教科を「人間がよりよいものを創りあげる営み」、すなわち「文化」であると捉え、教科の学びは子どもたちの生き方やふるまいを変えうると考えた。このような学びは、仲間と対話を重ねながら教科の本質にせまる授業によって実現されると考え、「教科ならではの文化」を味わうことのできる授業を具現化させるべく、授業実践と分析を重ねた。

各教科において、「教科で育みたい人間像」と、その人間像にせまるために授業を通して味わうべき「教科ならではの文化」を「教科の主張」としてまとめ、「教科ならではの文化」を味わうことのできる授業づくりを推進した。授業づくりにおいては、前年度までに見いだした①～③の「大切にしたいこと」を各教科の授業づくりに落とし込み、さらなる授業実践と分析に取り組んだ。

- ①教科の本質にせまる題材づくりと題材構想
- ②共有された問いに基づく追求（追究）活動
- ③「教科ならではの対話」を生み出すこと

授業実践と分析にあたっては、複数教科で教科群を構成し、授業案検討を経たうえで、授業参観および分析を行った。

3 研究の成果と課題

2019 年度の研究発表会における公開授業や教科別協議、指導・講評、およびその他の授業実践と分析から見いだした成果は、以下の 4 点である（各教科における具体的な成果については後述する）。

- (1)「教科ならではの文化」を存分に味わう子どもの姿や、教科で育みたい人間像にせまるふるまいが見られたこと
- (2)「教科ならではの対話」を生み出すことを意識して授業を実践することによって、子どもたちが対話を通して学びを深める姿が見られたこと
- (3)「教科ならではの文化」を味わうことのできる題材づくりや題材構想のあり方を見いだしたこと
- (4)「題材や教科を超えて学ぶ姿」が見られたこと

以上のような、子どもたちが授業で見せた姿やふるまいは、各教科がめざす総体的な人間形成に寄与するものであると考える。学習指導要領（平成 29 年告示）の資質・能力の三つの柱から捉えれば、「知識および技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が一体的に、あるいは相互に関連しながら育まれることを示すものである。このような姿やふるまいを生み出すことができるのは、「教科ならではの文化」を味わうという観点から授業づくりを進め、共有された問いに基づく追求（追究）活動や仲間との対話が、教科の学びとして本質的なものか、あるいは価値あるものかを十分に吟味しているからだと考える。さらに、仲間との対話が、生み出したい「教科ならではの対話」であるのかという視座を授業者がもつことによって、対話を通して題材の価値や教科の本質にせまる子どもの姿が見られた。十分な分析を経ていないものの、「題材や教科を超えて学ぶ姿」からは、「教科ならではの文化」を存分に味わっているからこそ、子どもたちが教科の本質を十分に踏まえたうえで他題材や他教科と関連させることができたと考える。

これらに関連して、研究発表会のパネルディスカッションにおいて、本校の研究に長年携わり、前校長でもある静岡大学大学院教育学研究科教授の村山功氏は、本校の研究を次のように位置づけた。

- ・静岡大学教育学部附属静岡中学校では、子どもが「教科ならではの文化を味わう」という捉えをすることによって、「何を身につけるのか」に関して能力（いわゆる「〇〇力」）で記述するのではなく、「子どもがどのようにふるまうのか」というパフォーマンスで語ることに特徴がある。
- ・授業づくりにおいて、子どもがどのような問いを共有し、どのような対話が生まれるのかを中核として、それらが「教科として成立するのか」に関して実践を通して見いだしていくことが大切である。

さらに、上智大学総合人間科学部教育学科教授の奈須正裕氏は、資質・能力、教科等の見方・考え方に関連して、本校の研究を次のように位置づけた。

- ・コンピテンシーとは状況における「有能さ」を指し、子どものパフォーマンスとして現れる。「〇〇力」というように一般的な能力として所有されているわけではない。その意味では、静岡大学教育学部附属静岡中学校の「授業で見たいふるまい」という観点からの授業づくりは、適切なアプローチである。
- ・子どもが「教科ならではの文化」を味わっている姿がすばらしい。その文化の味わい方に対して子どもが自覚的になり、他の文脈でも自在に使えるようになるような教師のかかわりが大事である。そのためには、授業で扱う内容をイ

グザンプルとして捉え、その内容においてどのような見方・考え方を働かせているのかということに、教師が自覚的になる必要がある。

以上の指摘も踏まえ、今後の課題として、以下の三点を挙げたい（各教科における具体的な課題については後述する）。

- (1) 子どもたちが題材の価値や教科の本質にせまるために、特に対話の場面における、視点の整理や焦点化といった授業者のかかわりやふるまいをさらに検討すること
- (2) 「教科ならではの文化」の味わい方（教科固有の方略や概念）を子どもたちが自覚し、新たな問題解決場面でも自在に使いこなせるように、授業者が価値づけること。そのために、「教科ならではの文化」の捉えを明確にし、子どもたちのあらわれを基に多義的に語る
- (3) 「教科ならではの文化」を存分に味わうことを通して「教科で育みたい人間」を育むため、題材のつながりや系統性に着目し、カリキュラムの再構築を視野に研究を進めること

今後は、以上の成果と課題を踏まえ、人間形成に寄与する教科のあり方、子どもたちの思考に寄り添った学びと授業のあり方をさらに追求していきたい。

以下は、各教科の具体的な成果と課題である。これらは、静岡大学教育学部附属静岡中学校研究紀要（第 20 号）の各教科の成果と課題を基に記述したものである。

<成果>

(1)に関する各教科の成果

- ・単に社会的事象を説明したり評論したりする姿ではなく、積極的に社会に参画したいという思いを発信したりする姿が見られた。（社会科）
- ・「科学的対話」を引き出すための題材を工夫し、子どもたちが一つの事物・現象をじっくりと追究することで、より深化された認識や、一般化された概念を創りあげていく姿が見られた。（理科）
- ・変化に富んだ音楽表現を織りなしている様々な「音色」や「音の重なり方」を知覚して新たな感受を得たり、奏で方を工夫することで「音色」や「音の重なり方」などが徐々に表情を変えていくことを発見したりして、心からの感動を伴いながら、表現や鑑賞を深めていく姿が見られた。（音楽科）
- ・デザイナーの見方や考え方を働かせ、デザインの本質について堂々と語り合う姿が見られた。（美術科）
- ・生活や社会に対して広い視野をもち、その場面に活用しようという視点で技術を見つめるようになり、「よりよい生活を営む人」の姿が見られた。（技術・家庭科（技術分野））
- ・子どもたちは新たな価値観にふれ、生活を見直す視点が増えたことにより、「何を一番大切にすべきか」「両立できないか」「どの方策がよいか」など、世の中の人々と同じようによりよい方策を追求し、生活に対する捉え方を広げることができた。（技術・家庭科（家庭分野））
- ・コミュニケーションの本質に気づいたり発見したりして、さらに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもたちの姿が見られた。（英語科）

(2)に関する各教科の成果

- ・他者と意見を交流することによって、「なぜそのように考えるのか」ということについて、叙述から根拠となる部分を探したり、自分の意見を捉え直したりしていく姿が見られた。(国語科)
- ・論理をつくりあげていく過程で、批判的に問い直し、矛盾や反例がないか試したり、「別の場合もやってみよう」とさらなる問いを生み出したりするなど、問い直す対話が生まれた。(数学科)
- ・音楽に対する感性を豊かに働かせたり、「言葉」や「音や音楽による表現」を媒体にしたりしながら、民族音楽だからこそのよさや美しさにせまっていって対話を繰り返す姿が見られた。(音楽科)
- ・外部企業からデザインを依頼されるという設定を用意したことで、子どもたちがデザイナーになりきって細部にまでこだわり、デザイナーらしい対話を重ねながらよりよいものを追求する姿が見られた。(美術科)
- ・グループの仲間と話し合う場を設けたり、全体で共有したりすることで、自分では思考していなかった視点があることに気づき、様々な視点から解決策を思考しようとする姿が見られた。(保健体育科)
- ・設計や製作を進めていく過程で生まれる疑問や切実感のある問いを解決するために、自分なりの方策を考え、それを仲間と共有し、試したり、検討したりすることによって、方策を吟味し、具体的な解決策につなげていく姿が見られた。(技術・家庭科(技術分野))

(3) に関する各教科の成果

- ・子どもたちが、前の題材と比較して考え、読みを深化させたり、自分の思いが適切に相手に伝わる表現方法を主体的に追求したりしていくように、題材配列を工夫すること(国語科)
- ・「現実の社会と自分とのつながりを感じられるような題材」を開発すること(社会科)
- ・「日常生活や社会の事象を数理化する題材」に関して、子どもたちが無理なく設定に入り込むことができ、問題解決に向けて、条件をつけたり、理想化・単純化したりしていけるような題材づくりを行うこと(数学科)
- ・子どもたちの「伝えたい!」「知りたい!」という思いがあふれ出てくるような題材を開発すること(英語科)

(4) に関する各教科の成果

- ・物理現象を数学の知識を用いて数式化し、比例定数を求めていくことで、現象を明らかにしようとする姿、すなわち他教科での学びや日常での経験を生かす姿が見られた。(理科)
- ・思いを込める衣生活を追求する過程で、以前の題材で学習した素材の機能について言及したり、その際に使ったワークシートを参考にしたりして、既習事項を活用しながら考えようとする姿が見られた。(技術・家庭科(家庭分野))

<課題>

(1) に関する各教科の課題

- ・子どもたちの発言を、いつ、何を、どのように焦点化し、問いの解決に向けて対話を促進させていくか。(社会科)
- ・どのような声かけや問い直しが、子どもたちの発想を引き出し、深い学びに向かう対話をうながすのかを意識したうえで、意図的にかかわっていく必要がある。(美術科)
- ・子どもたちから出た視点を、授業者が整理したり焦点化したりすることが必要になる。(保健体育科)
- ・科学や法律によって裏づけられている資料や、異なる立場の人の考えを知ることができる資料など、資料の質を充実させ、適切な場面で提示すること。(技術・家庭科(家庭分野))

(2) に関する各教科の課題

- ・一つ一つの題材において育まれた子どもたちの学びが、どのような「概念」として身についていたか。(国語科)
- ・子どもたち自身が、日常生活や社会の事象を数理化するよさをどの程度自覚できているか。(数学科)
- ・あきらめずに既知の単語や表現、ジェスチャーなどを総動員し、コミュニケーションを図ろうとする粘り強い態度がどのように育まれていくのかについて明らかにすること。(英語科)

(3) に関する各教科の課題

- ・「なぜその作品を選定したのか」ということについて題材配列も含めて改めて検討していく必要がある。(国語科)
- ・授業者が別の題材において本題材とのつながりをどのように意識して授業構想できるか。(数学科)
- ・題材の順次性や系統性を整理し、題材同士の構造化を図ること。(理科)
- ・実感を持った音楽文化に対する概念的な理解を深め続けていくために、各学年・3年間・小中9年間の学びの見通しをもったり、領域や分野をまたいだ題材を意図的に組んだりしていくこと。(音楽科)
- ・じっくりと時間をかけて追求する場面と、そうではない場面とを意識して題材の構成をする必要がある。(美術科)
- ・題材と題材がどのようにつながるかについて、さらに研究していく必要がある。(保健体育科)
- ・学習指導要領で示されている内容を統合的・複合的に捉えること。(技術・家庭科(技術分野))

【参考文献】

- ・静岡大学教育学部附属静岡中学校、村山功(2019)『対話が深める子どもの学び—教科ならではの文化を味わう授業—』明治図書。